

福岡県で見いだされた緑化樹の病害（続のIX）

— 1995年から1998年に見いだされた病害 —

福岡県森林林業技術センター 小河 誠司

1. はじめに

樹木の病害は、ある環境のもとで植栽・栽培された場合には、非常に激しい被害をもたらすことがある。一方、緑化用樹木として、今まで利用されていなかった樹種や、外来種が数多く栽培・植栽されるようになった。福岡県での平成9年度の緑化用樹木の総生産本数は、中高木で約24百万本、低木で約24百万本である。

このような状況の中で、樹木の病害を記録していくことは、将来の緑化木管理の面で重要であると考えている。これまで、福岡県で発生した樹木の病害については、機会ある毎に公表してきた^{2,3,4)}。

そこで、本報告では、前回報告した1995年以降に福岡県下で記録された病害について記載する。

2. 1995年～1998年にかけて記録された病害

上記期間に記録された病害の一覧を表-1に記載した。病害は、葉に発生するものが多くなっているが、枝・幹の病害が少ないのは、観察する機会が少ないことと、何らかの環境変化で樹木が耐性を失ったような場合に発生することが多いために、病害と考えずに観察時期を逸することによると考えている。

以下、主な病害について詳細を記載する。

(1) シャシャンボの平もち病 (*Exobasidium* sp.)

病徴：新葉に5~10mmの円斑を生ずる。円斑の表面は淡黄緑色で、表面は灰白色粉状である。患部は僅かに肥厚し、裏はくぼむ。

病原菌：裏面病斑上に担子柄を生じ、2~3個の小柄に担子胞子を生ずる。担子胞子は、無色、1個の隔壁を有し、大きさ12.5~20 μ m \times 4.5~5 μ m。

ノート：本病は、1998年7月に遠賀郡岡垣町糠塚で見出したものである。シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum*) には、江塚¹⁾が平もち病 (*Exobasidium* sp.) を記載している

が、本病の病徴、病原菌の形態はその記載に一致している。種名については、江塚の記載を待ちたい。

(2) シャシャンボの褐斑病 (*Discosia* sp.) 新称

病徴：葉に褐色円斑を生ずる。病斑周囲は、濃褐色帯で囲まれ、淡紫褐色のボカシを生ずる。病斑中央部は灰褐色に変じ、葉表病斑上に黒色で中央部が裂開した小隆起物を散生する。

病原菌：子実体は表皮下に生じ、やがて表皮を破って頂部を露出する。幅広く高さの小さい円盤状で、分生子柄は短い。分生子胞子は、分生子柄に単生し、長楕円形でやや湾曲、無色、3隔壁、大きさは30~40 μ m \times 3.8~5 μ m。両端に細く無色、単細胞で、長さ12.5~15 μ mの付属糸を有する。

ノート：本病は、1998年7月に遠賀郡岡垣町糠塚で見出したものである。シャシャンボには、*Discosia* 属菌による病気は記載されていない。ツツジ科 (*Ericaceae*) には、ムラサキヤシオツツジ (*Rhododendron albrechtii*) に、*D. rhododendri* が記載されているが、他の樹木の *Discosia* 属とも比較検討し種名を決定したい。ここでは、ムラサキヤシオツツジの *Discosia* 属菌による葉の病名に従って、シャシャンボの病名を褐斑病とすることを提唱する。

(3) ハイノキの果実のもち病 (*Exobasidium* sp.)

病徴：ハイノキ (*Symplocos myrtaea*) の果実に発生する。感染時期は不明だが、果実の成長時期に異常に果実が肥大する。肥大果実は最初光沢のある緑色~淡緑色を呈するが、花梗と花跡部分を残して、菌糸層で覆われ、灰白色~淡い灰緑色になる。

病原菌：被害果実の菌糸層上に担子柄を生じ、担子胞子を生じる。担子胞子は無色、楕円形、発芽時には2隔壁、大きさ15~22.5 μ m \times 3.8~5 μ m。

ノート：本病は1997年6月に、八女郡矢部村藪で発生したものである。ハイノキ (*Symplocos*) 植物の果実に発生するもち病としては、クロキ (*Symplocosiuca*) に小河²⁾

が記載しているが、種の同定を行っていない。また、担子胞子の形状、大きさはクロキの病原菌に類似しているが、本病原菌では担子器と小柄の調査ができなかったため、クロキの病原菌との比較ができていない。今後は、発病部位にかかわらず、ハイノキ科植物のもち病菌の比較検討が必要である。

(4) クロキの炭そ病 (*Colletotrichum* sp.)

病徴：小枝に黒褐色斑点が多数形成され、やがて拡大癒着して縦長に進展する。拡大病斑は、周囲が濃褐色、中心に向かって褐色から灰褐色になり、灰褐色部はカサブタ状を呈する。病患部が枝を一周するとそれから上部は枯死する。病患部には繊維方向に縦長の黒色隆起物を生ずる。隆起物は中央部が裂開し、淡橙色の孢子塊を噴出する。

病原菌：小枝の表皮下に生じ、やがて表皮を破って頂部を露出する。分生子層は、幅 300~400 μ m × 高さ 125~275 μ m。分生子柄は無色、単胞で、10~12.5 × 3.8~5 μ m、分生胞子一つ頂生する。分生胞子は、楕円形で頂部は円く、基部に分生子柄との接続痕を残す。無色、単

胞で、31.2~40 μ m × 10~12.5 μ m。

ノート：本病は、1995年に福岡市と岡垣町で採取したものである。クロキには、1994年夏期の乾燥から小枝枯れ、そして太枝枯れへと進行する被害が散見されていた。クロキ (*Symplocos lucida*) には、炭そ病の記載はなく、ハイノキ科 (*Symplocaceae*) にも炭そ病の記載はない。炭そ病は現在種の再検討と整理が必要とされ、研究が進んでいるので、種の決定はその結果を待って決定したい。

参考文献

- (1) 江塚昭典：日植病報，41(3)，253，1975
- (2) 小河誠司：日林九支研論，44，129~130，1991
- (3) ————：日林九支研論，48，141~142，1995
- (4) ————：森林防疫，45(2)，11~15，1996
- (5) 日植病学会編：日本有用植物病名目録，第4巻，第5巻，日本植物防疫協会，東京，1983，1984
- (6) 谷利一監訳：芝草病害概説，改訂第2版，12~13，ソフトサイエンス社，東京，1995

表-1 新たに記録された病害

樹種名	病名(病原菌名)	病患部	文献
イヌマキ	<i>Pestalotiopsis</i> sp.	針葉	b
	白葉枯病	針葉	a
ケヤキ	<i>Phomopsis</i> sp.	針葉	b
	ならたけもどき病	根幹部、幹	c
センダン	<i>Phomopsis</i> sp.	枝	b
	<i>Valsa</i> sp.	枝	b
チャンチンモドキ	さび病	葉、葉柄	b
イイギリ	さび病	葉	a
ツルグミ	さび病	葉	a
ハナミズキ	うどんこ病	葉	a
	とうそう病	葉	a
セイヨウシャクナゲ	さび病	葉	a
クルメツツジ	さび病	葉	a
シャシャンボ	<i>Discosia</i> sp.	葉	b
	平もち病	葉	a
クロキ	炭そ病	枝	b
ハイノキ	もち病	果実	b
オロシマチク	アスコキータ葉枯病	葉、葉柄	d

- a: 日本有用植物病名目録^{a)}
- b: 病名のなかったもの
- c: 新寄主
- d: 谷利一監訳：芝草病害概説(1995)

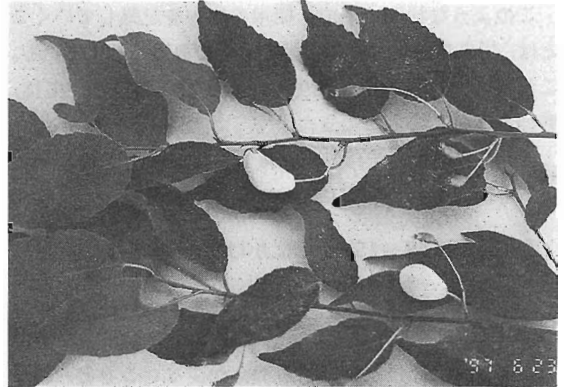


写真-1 ハイノキの果実のもち病



写真-2 チャンチンモドキのさび病